（逓信省認可）

掲載要目

懸賞文藝 新婚旅行

韵文 さびし小田

いらつめ

韵文論 眉楊子

小遊女史れ

懸賞小説

秋水樓主の小説

むらくも

第七十五號

定價二錢五厘

明治廿三年十二月五日發兌

Digitized by Google

Original from CORNELL UNIVERSITY

いらつめ第七十五号目次（明治廿三年十二月五日）

新婚旅行の人を送る（懸賞文藝）……撫箏女史
さびし小田（韻文）……眉楊子
恐月先生ヱ（寄書）……小蓮女史
懸賞小說（下）……秋水樓主人
むら雲（讀切小說）
一種の玉子酒
髯と人物
物の言ひ方
髮の艶をよくする藥
應募孃の宿所
東京で文學科を專攻する學校
東京の下宿料
其他種々

定價及び廣告　いらつめ一部定價金二錢五厘郵稅共金三錢、十二部金二拾九錢郵稅共金三拾五錢、二十四部金五拾七錢郵稅共金六拾九錢、三十六部金八拾四錢郵稅共金壹圓〇二錢、四十八部金壹圓郵稅共金壹圓二拾四錢〇別製一部金三錢五厘郵稅共金四錢、二十部金六拾五錢郵稅共金七拾五錢、五十部金壹圓六拾五錢郵稅共金壹圓九拾錢〇並別製共前金領收の上で無くては發送せぬ事〇府內に限り無郵稅〇每月二回（五日及二十日）發兌〇金子御差し送りの手續きは郵便小爲替なれば拂渡郵便局をある處に、神田郵便局と記し受取人欄內に（神田平永町九番地成美社）と御記入の事〇郵券代用には郵便爲替の無い處に限り五厘切手で一割增しなれば妨げ無い事〇見本は五厘切手で並製五錢別製七錢領收の上發し上ます〇廣告料一行金八錢、割引無し

從第六十八號至第七十七號十部版權所有

明治廿三年十二月四日印刷　明治廿三年十二月五日出版

發行人　山田武太郎　東京市神田區平永町九番地居住

印刷人　山本鑑之進　東京市本鄉區駒込西片町十番地居住

發行所　東京市神田區神田平永町九番地　成美社

○懸賞文藝新題

○第卅四回題（何でもよし）……十二月十日〆切
右　鳥蔭れ獺猴

○第卅五回題（何でもよし）……十二月廿日〆切
右　春衣裁縫

○第卅六回題（何でもよし）……一月十日〆切
右　人に半襟を送る

○第卅七回題（唱歌文章に限る）……一月廿日〆切
右　無言の愛情

○第卅八回題（何でもよし）……二月十日〆切
右　嬉しいもの何でも三つ

賞品も菊水摸樣の金又は銀杯

右賞品は一等賞の者、二等三度の者、三等六度れ者、四等十八度れ者及び是と同じ資格に相當する者に限り進呈します。〇賞が重なつて數が充ちた人は其賞を受けた題を詳細にしるして賞品を御請求なさい。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

第三十二回懸賞文藝應募得點

題　新婚旅行の人に贈る

○俳句

女郎花うらやむ野路のふたりかな……永島芳子(井ブリ)

右無賞

○和歌

みどり子の色まつごの枝のいもせたつ
まひたつけふぞゆくしかりける……撫箏女史(ミノ)

相生の松をまたひつともにゆく
妹脊の旅ぞうらやまれける……竹下山人(フンレマ)

隔なきこゝろを旅に悟り得て
妹脊を千代に契るあるらん……仝　上

旅といへば物うたものをむつましく
ちぎりかはして出る君ゆも……横山ひろ(ヒウカ)

以上四首無賞

いもせ山たかきよはひをちぎるある
きみが旅路でうらやまれけり……撫箏女史(ミノ)

草枕よあく結ぶ白露は
いもせのなかをてくもそむらん……芮園居士(フンシマ)

いかばかりのどけうるらんけふよりて
旅たつ田鶴ももろごゑよして……仝　上

むつましくつばさならべし友鶴ハ
いつこの松に宿さたむらん……横山ひろ(ヒウカ)

あさからぬ契りあればやそしどりの
いづてのふちとおもひたつらん……本吉ミ代(ヒウカ)

末かけて共にちぎれバ旅ごろも
きてゆく先やたのしかるらん……仝　上

以上六首第四等賞

幾千代をかけてちかひも堅田ある
かりのやどりや嬉しかるらん……本吉みほ(ヒウカ)

右第三等賞

物うさとおもひこそやれ草まくら
をしれ衾よかへてねる夜を……碧溪閑史(オホサカ)

今はとてふもとを分つ驛路よ
見かへりてのみことの葉はなし……仝　上

以上二首審査以外

○唱歌

(イ)

めでたき御代よあひ生の
色もまされるきみかせて
さかえさうゆるまかうつき
送るけふこそめでたけれ
松のみどりのいやましよ
ちぎりて末ハ千代八千代
とりどり君のにひ旅を
送るりふこそめでたけれ。……撫箏女史(ミノ)

右無賞

(ロ)

鶴さち子(ケイトリ)

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

見渡せば　袖の浦わの　朝日かげ　かすみ渡りて
うら〳〵と　きみがゆくてよ　かゞやけば　いとのどかなる
門出ぞと　思ふこゝろを　水くきよ　かきつらねつゝ
いはゝまし。　むすぶの神の　めぐみにて　二人ひとつと
なりぬれば　嬉しき旅の　草まくら　つゝがもなくて
神路山　かみの守の　ふかゝれば　世と住吉の
浦かせも　たゞでゆたかの　君が代は　浪もしづかに
をさまれる　ときはの松と　もろともに　千年をよはふ
鶴のこゑ　その聲すなはち　ひなづるの　千代々々となく
愛らしさ。　君等二人の　命ぞと　思へば我も
諸ともよ　千とせをのぶる　心地して　二人が中よ
又ひとり　松のみどり子　引きつれて　かへり来る日を
楽しみて　まづはうれしき　月日かな。　まづぞうれしき
月日かな。

（ハ）　松乃（イヘシロ）

こきやうの山は雲の外　野梅にかゝる春雨や、
、、、、、、、　、、、、、、、
さみだれ空をきりひらき　もれてきらめく月の鎌、
島山遠くかげ清き　甲板上のあきの月、
きこりの道も埋もれて、　ゆきゝのとまる冬の雪、
いよ〳〵しげ〳〵往きかふは　ます〳〵堅くむすぶるて
二人の君のこゝろかな。　二人の君のえにしかな。

以上二曲第四等賞

（ニ）　碧溪閑史（オホサカ）

えにしの糸の末長く　千代と契りし日も浅く
初々しさにかしまだち　行くなる君をはる〴〵と
思ひわびつゝしばしとて　袖にすがるもはつかしく
うち出でいはんしやもなく　瞼うるはし立ちかれ
さひしき閨に夜もすがら　いねがてよして起かへり
汽笛の聲ぞ耳にのこれる。

右審査以外

○文章

（イ）　松州（トワケイ）

はて何と言ッていゝかしらん「それでして暫く……」からいふもどうだか。「左様なら御機嫌よう……」これもいけない。はて「君が今度の旅行は僕に取ッては實に辱ない……」からいッた所が何だかをかしい。さらばといッて「君が歸るまでは淋しくッていやだ」ともいはれぬ、はてな……だが親夫親婦相手を携へて旅行するのだから何でも御目出たいに違ひない。しかしせうも何といッていゝだらう。お母さんに何といひましやうッて聞くもあまり小供らしいし。しかし默ッて餞辭義をそるもあんまりだし。して……いやもう十時だ。もう迫ッた。えェ何か其場になッたら言はれるだらう。それ兎に角行くとしやう。

「なゝ御母さん一寸松本のとこまで行ッて參ります。」

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

く／＼十二時の汽車で夫人同伴で東海道地方へ旅行するさうですから……」

「おやさうかえそれではこれを御みちさんにあげて、そしてよくいツておくれ。　御見送りするのですが病後まだ歩行も十分でないからツてねエ。」

「へエ承知しました。　それでは一寸……」

富士の高根を仰ぎては　頭の雪を三保の松、
末を常盤にちぎりつゝ　二見が浦の雌雄の石、
ひく注連ながく撓みなく　妹脊は道とかためませ。

（ロ）　　一一女史（トウケイ）

御返しまでに一筆染しまゐらせ候　如仰打つゞきての天氣にていづこもうらゝかなる小春日和の此頃は取りわけおもしろう覺えられ候。　今日は御便のもの參り候ゆゑ、御内によび入れいろ／＼の話し被致、殊に御中睦まじきなど御老人樣方にもいかばかり御喜び被遊候。

さて近日中より近縣御旅行の御つもりの由此上も無き御事と存じまゐらせ候。　いつれそれまで御伺可申候。　いふまでもなき事ながらくれ／＼も旅中に御心つけ可被遊、男にはよろづ心強くたのもしく候得共こまかき事にはかかりかねるものなれば女の身のつとめはこれにて候。　御許も學問こそは遑ましく任せども學校そだちのまだ年若きまゝ世のうきふしに慣れたまはねば何事につけてもあまり成人ぶらぬ樣つくりなさり玉へば間には足らはぬ節もあらんも却つて人は愛敬がのり可申候。　かくよしなき事ども申上候は釋迦にせつはふとやらにてお恥しくそ候へども何事も姉といふ名にめんじて不惡御思召ねがひまゐらせ候。　なほ申上度こと山々あれどもまはらぬ筆なれば餘は御目もじの後にゆづりまゐらせ候。　御姑御樣方には御許樣よろしく申上被下度候。

あら／＼かしこ。

武雄樣並

（ハ）　　雅水子（トウケイ）

左の手に切符を握り、右の手に蝙蝠傘を携へて、あわただしく新橋發の汽車の客車へ飛入ツた男こそ即ち私でした。

「もう一分遲れたなら乘り損ふた所、これで安心した。」

はツと息を吐いた時、轟然瀛笛の聲と共に車は運轉をはじめました。　私こそ嬉しやと喞ちながら急いで腰をかけて、胸の動悸を撫でおろしました。

私の前の腰かけに若い男がゐて、其妻らしい女子とさも愉快さうに笑ひながら極細い聲で何か話してをりました。時々「愉快！」「樂しうございますそ」といふ聲が私の耳の鼓膜に響きました。

私は目を盗んで其男の顔を見ました。　見て思はず愕然！

「や君は吉倉君ぢやないか。」

「さういふ君は雅水君」

「これは實に珍らしい所で。」

「ほんとに久々の御對面だ。　其の後君は御壯健？」
「有り難う。　して君は？」
「僕も無病息災だ」。
「それは何よりだ」。
「この女子と僕の新婚の妻で」。
「君は既に御妻君を……それは實に賀すべきの至りだ」。
女は腰掛を離れていと丁寧に、
「私は雪とまうす吉倉の妻。　承はりますれと貴君は宿の御友達……せうの以來私にも御懇意を願ひます」。
「あれと始めての御面會、僕は吉倉君が千葉にゐた時分御懇意にした雅水といふものですが以來貴女にも御懇意に！」
「ありがたうござります」。
女は又腰掛へ、私は又吉倉へ。
「僕は少し用事があつて大森へ行くのだが、君等は何處へ？」
「江の島から京都の方へさ」。
「そんなら新婚旅行か？」
「さうさ」。
「それは夫婦間の愛情を深くする最上手段で、かつ最上愉快なことです。　御旅行中の御愉快實によれもひやられて羨ましう御ります。　定めて此塵界を遠く離れて、無垢れ月世界へ登る思ひがしましやう。　人知れす精一杯御愉快をしたまへ。　奥さん御樂しミでそれね。　充分おまへておやりあさい。　御かへりに御土産を澤山買つて來て頂戴な。　と、」
女―まだ未通氣の奥さん―もとや顔に紅葉下をひいて無言
吉倉とポツケツトから名刺を取りだして、」
「當時僕と此所よ住居してをりますから是非御遊びに……來月上旬には遲くも歸宅致しますから。」
「難有う。」
受けとりながら僕も同じく取りだした名刺、其裏よ數行の文字と記して、
「僕と御存知の通りれ不粹男だからまだ歌あせと作つた事もありませんが、聊かこのおめでたい御旅行を祝する爲め、謹んで愚詠と君に贈ります。　そして僕れ住所は當時此所てすが御歸京の後是非御遊びに……」
「八千代までいかで替らんりはらじと
　ちぎる旅路やたのしかるらん
手に手をば引き相生れ松よりも
　なほさかゑゆく事ぞめでたき
あれは御名作、難有う。」
折しも驛夫の聲、
「大森引」
「もう大森か。　話しに浮かれて汽車の速力が減じて行くのも知らなかつた。　ろんならこゝで御別れ申します。　奥

さん精一杯御樂しみなさい。」
「わゝこゝで御別れか。またいづれ。」
「あなたそんなら御免下さい。」

（二）　　禿子（イセ）

年寄りたれど若かりし折の事は忘れぬものなり。その時代にはわれも隨分蕩樂息子との評判受けしが嫁貰ふてよりはのづと魂入れかはり、眞面目よつとめし甲斐ありてそれ、つかの間にはたきし身代もかけもどり、身幅もひろまりければ、これも嫁が力のほきによるとおもふ矢先へすゝめらるゝまゝ御隱居のお暇ねがッて嫁つれてゐたりお蔭參りと出掛けしは仕合せものよといはれしが旅立ちしあと三日目、ふる里のよき面の皮ときこえしは殘念、途中宿の主人と些細のあとに喧嘩してやけぱらたてゝ夜途無頓着なるきし四本の脚がつかれし時分、藪際よりやゝまてと不意の叫びに仰天すれば白き長きものの眼のさきにひらめき、あとはおぼえず、夜あけてさわぐ村鳥のおとき百姓にたすけられ、それは運つよき奴ぞ。よく蘇生せしぞと囁めく聲に眼をこすれば嫁血に塗れ……これ外もいふまじ。なゝいますこしたのしく家に在るがよかりしならんと袖を噛んだぞ、君の行も注意するがよし、用辭だけ左樣。

（ホ）　　同上

承り候へばおふたりには來月さうさう新婚はじめての御旅行をなさるとの事、さぞ御愉快ならんと存じ候。失禮ながら御旅行先も畿内諸地方ぐらゐと聞き及び候まゝ爰に私の案じ候ことを御一考にもと申上候。さてもおふたりにはお金山の如く被有之候御身分に候へばもそッと新奇な存外な御旅行をなされても什麼にそや。それとても空中旅行、海底旅行もふるくさく候へど、どッと趣向をかへて奈落見物、浄土巡迴を申上候てもこれはちと六かしく、かつてもおふたりよも御店日々御繁盛にてお世話のやけること存じ候へばおいそぎなされ候てもよろしく候間、世間いやくさき土くさき埃くさき貧村貧町を御旅行なさき候て瓢箪腹の奴等、青菜面の餓鬼原よあたゝあきれ慈悲をおぶせられ候ては什麼に候や。善根にうもれず、いつのおふたりに御利益の及び申そて私保証仕るべく、またそれら御見聞なされ候へは御勘考に相成可申事も澤山有之べく、それはみの幾千万のうれしがるもの御座候へば未來はおふたりの御身分は御心配御無用になるべくこれも私請合申すべく候。そべてまろき事は露ほども申さず候間それは御つもりにてれとりわけあさるべく候。くれぐれも虚語などと思召されざることそれふたりは御身の御德と存じ候まゝ不調法ながら申述候。

（へ）　　水野秀（オホサカ）

以上五章無賞

こゝよ桃李の良縁を結びたまひし目出たさはおよ想像の及ぶべき嚴父慈母の心おそいかに嬉しくありしならめ。その親睦を早めんとての旅行、あれぞ旦ごの國未曾有の妙案！ 愛と愛との一心二体、飛びかふ蜂か舞ふ蝶か、喜びいさむ晴の旅、鴛鴦の比翼を打ちのばし、蓮歩と運ぶ嚴島、婦徳と祈る辨財天、をがみまつるや七恵比須、七の浦の景色をば眺めてあそぶ船のうち、こゝとわきとし後に見てこれより遠く天の橋立に歩を止先、きよき心の左視右観、よもの眺めに筆とりて思ひのまゝの吟詠はいかにめでたくありなんかし。これより德を松島の松の操よたくらべてかはらぬ翠行く末の枝ぞとたのむ心なれ。枝よ巣をくむ仙禽も沼ふ遊ぐる靈龜さへ千歳の契を示すめり。きくならく可愛き子よは旅させよと昔の人の諺は今もかはらぬ有り難きくるしき事を打ち忘れ、愛と情の結び目の新婚旅の心こそ喜憂の旅や浮世路を渡る水操や舵ぞかし。五句の旅よ三景を眺めて目出度歸へり來ますを待つことになん。

旅の空こそ（ト）　撫箏 女史(ミこ)

旅の空こそ悲しけれとはいよしへ人の筆すさびにし言のこよぞありける。げにや木ふかきかげよ夜あかしつゝ、空にしられぬ時雨に袖のひるまなかりしなどさこそあんあれ。さはあれどみめこそ異あれ心はつねよ相生のうれしき旅にしあれど松ふかく、風もなかく〳〵よをかしく、盤渉調の律のしらべにすみわたる琴のよはひをぞいはふなる音ともおもほえつべく、池にあそぶ鴛鴦のさま見ては心へだてぬいもせのめでたさもまさりつべし。あしびきの山路たどりなば妹脊の山れいと先でたきを喜びたまふべく、をさ〳〵しき流れにうりびあげ戀れふちのいと深きをさとりたまふべし。わはれてたび君の旅路といみじく心にくきてあらじかし。きみはおほゝせたまふべし旅の空こそことよあらうめでたゝれと。

以上二章第四等賞

さびし小田(韻文)　撫箏 女史(ミこ)

淋し小田ーはや八束穂て　かりはてゝ　今は鳴子も
なづさゆみ　引きすてられつ　縄さへも　いづく失せしか
しろたへに　霜さへむそぶ　ふか編笠　かざせし人は
今いづこ？　そのねしと見む　のこしさへ　猛きむかしに
似もやらで　見るかげもなく　やれはてつ　弓つる弛べて
ひれふせり。
群鳥か？　むら小鳥こそ　いまぞ噪　心ゆたかに
なさるらめ　とり〳〵うたふ　其こゑぞ　げにものどけく
すみまたる　空よひゞれて　さやかなり。

仝　上

くもまなせし葉て散りはてゝ　なかめさびしき庭の木々
小鳥とびのふその影に　くるへる猫の愛らしや。
窓の障子よむれわたる　小鳥のうげはよきはへと
防ふ人もなくとぶ蝿も　羽音をしみて力なし。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

恐月先生に呈そ　　眉橋子投

前略——本日の「國會」文苑に於て先生の御名を認めると其儘、見れば「詩(ポエッジー)」と題されました。美妙齋主人の筆が滴ッて「日本韻文論」と「國民之友」に顯はした後稍眼と注ぐ様にあッた—但しそれは私のみで—。時節がら再三精讀しました。先生—敬愛する先生、許せ—願はくば先生の大度を以て私を一顧せらるゝ事は出來ますまいか？

詳々しい前言を述べて私の罪を重ねました。進んで先生の御教誨を祈ります。詩とは何でしやうか？ 先生曰く、詩とは言葉の働きに由て、人間の性情生活と意思生活との美術的に發揮せられたる者なり。

誠に御尤もな御釋義。感服の外は無いです。嗚呼先生にして而して後此卓拔明晰なる釋義なりと窃かに歎服に堪へません。殊に面白い一二句。

吾人が詩を論ずるは外部の形式よりせずして内部の本質よりするの故に、苟くも美術的の文辭は悉く詩といふなり。此の如く先生の御見込にては外部の形式よりせずして内部の本質よりするとの事。美術的の文字は悉く詩といふなり—先生は—。故に定義と下して美術的に發揮せられたるものとの仰せ。感服々々。御着眼の處、時流をぬきんづる幾十等。をんだ不知庵と御笑ひ下さりますな！

古今未曾有(？)は御議論、後來の文學海に恐らく大波瀾を起すでしやう。殊に先生は外部の形式よりせずして内部の本質より論ずる。國民新聞紙上の路功處士と意氣投合したれを祝したでしやう。涙と振ッて喜んだでしやう。但しは路功處士は先生に先ちて生きたでしやうか？ 或は—許せ—路切處士は先生に先ちて生れたでしやうか？ ケースが促しませんでしたらうか？ 兎も角も一致した議論が突然として出て來たれは御幸福でしやう！

先生の下した定義は先生自身でさへ完全無缺ではあるまいとそれ仰せ。岡目八目、傍觀者が感心しないのも無理ではないです。「詩者人心之感物而形於言之餘也」、當世流に言ひ換へた丈々、完全でないのも無理では無いです。が、唯夫に止まりません。先生の詩は韻文でも散文でも何んでも來いの詩、抑先づ其處が疑問です。「露子姫」も詩でしたか。梅暦も詩でしたか。内部の本質からは如何判定しますか？ 無論韻脚が無くッて詩であるものがある。が、併し外部の形式が無くッて備はらぬで詩……それを詩と言はい詩でしやうが言へましやうか？ 私の疑問は此處らからです。先づ是を確めたいです。

只夫の博識英才なる—吾人が常に敬愛する—恐月子の所謂詩(ポエッジイ)は如何の物でしやうか？ 吾人は確かにポエッジイの異性質を得た物でないことを信ず。先生が外部の形式によらずして、内部の本質といふ、詩の本質は何處にあるか？ 夫を確めざる間は笑ふべき新語！ 言ふ、誰も言ふ！ 解る、さッはり解らぬ。美妙齋先生が言はれた通り、詩思とか文思とかなれば、まだしも何を標準として論定し來りましやうぞ。問題は是からも湧くです。

ならば先生散文といふものは如何のものです？ ありませんか？ 世の中の物は總ての詩でしやうか？ 秩序なる科學

的の議論の樣な外は皆詩でしやうか？　疑はしいといへばいくらも疑へます。　いゝえ疑はない譯には參りかねます。ならば詩と散文との區別はどんなでしやうか？　結搆でしやうか？　あらば外部の形式ではありませんか？　思想ですか？　ならば詩思と文思とはどれほどの違ひがありましやうか？　美術的に發揮せられたのが詩。でないのが文。詩でないのは文。文でないのは詩。　が、美術的に發揮するとて何の事です。　排列でしやうか？　意匠でしやうか？　排列なら形式と違ひましたか？　意匠ならばどんな物が詩思でどんな物が文思？　先生の大眼光でならいざ知らず。　嗚呼私し唯私一人の眼には錯亂紛雜。論の基礎と緒口をば知りません。先生！　ポエツイとは其樣な事を表示しますか？

要するに散文は散文、韻文は散文と條理を井然とさせるべき道理も煥然として存してゐますのに夫とば盡く混同しる論者の說に私は承服されません（丁度美妙齋先生の言ひました）斯く私が種々數千言を費やすのも動もすれば韻文と散文とが混沌するのを慮ふる故。　尙鄭重にも先生の御叱敎を仰ぎます。　結尾に及んで先生も發揮するのは詩人だと仰せられた。無論詩は詩人が發揮するもの。　が、詩は詩人が發揮するものだとは少し如何でしやうか？　蛙を聞て叩り出すのや、月を見てながめ出すれは必ずしも詩人に非ず。　誠に千金兩手を擧げて必實に御同盛は表します。

禮に嫻れぬ私、多少の失言は深く謝するところは希くは、　多罪堅見敢ふべしでなくとも必ず御敎訓と仰ぎ奉ります。　多罪々々。

十一月廿六日午後七時

懸賞小說（下）

小蓮女史

飽れも飽かれもせぬ夫婦中も無殘やその心臟病が遂に生木を裂れました。　杏林に春の回るといふ事は人の句に見るだけの事と爲つて、國世は遂に黃泉の人となりました。後に殘つた大坪や國子のなげきは言ふ迄も無く、五七日、七七日いづれも涙の海に沐浴して大坪の一家は春も春で無く、晝も全くぬば玉の闇と爲り果て、物事が物事すべて悲慘の種となりました。

國子の世話は國世が存生の中から使つた乳母が身を粉に碎いてするので、大坪の身にもさしたる難儀とかゝらぬ物の、さればとて大坪も年まだ若い身分、是非も無いこと、人もすゝめれば自分もその氣にいつゝ〳〵成つて來て、それからして後一年ばかり過ぎて後可ありの財產のある家から後妻とむかへる事となりました。

鬼か蛇か後妻はつとめの內こそ國子をもよく扱ひました。日とかさね、月を經るに從つて眞綿の中に針を籠してちくちくと遣り出す、それも大坪が出仕した留守の間に限ることゝて心のいゝ父親の耳には入らず、たゞ其たび毎に泣きしつひ國子を見ては乳母が身を切られるやうに爲りました。

なる日も亦何か惡い事をしたとかで烈しく國子を叱られま

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

した。　眞逆に手をあげて打擲もされなかッたものゝ、黒痣の出來る程には抓られました。　泣けば泣くで人聞きがわるいとて猶怒られる、それが苦しさにじッと堪へる事とて可愛さうな子供の身が頭のわれる程な頭痛とさへ覺えました。心もひがんで來れば部屋へ歸つてから國子も大ぢれに焦る、とりさへる乳母の千思万感、それは言ふだけが無駄でそ。さすが様々に慰められて幾分も心も落ち付いて、くやしくは有る物の仕方なく、見晴しのいゝ二階の窓から顔を出して、茫然として見わたすのも全で夢でした。

處と部外で見るからが快い青草緑水は一天地、愁のたまり切ッた身も自然の平和に對しては暫時安らかな心持ちもしました。　見れば道端の草陰に誰が落としたか、それとも捨てたか、一冊の寫眞ブック、不圖それへ目がとまッて寫眞といふ感じが胸へむらむらと浮んで來れば……

○　○　○　○　○　○　○　○

急に座に立ちもどッてけや〳〵しく

「ばァや、阿母さまの寫眞はどこ？」　（そはり）

むら雲（小説）

秋水樓主人

（上）

あたい、出來ないからもう廢すわ。」これがお房と云ッて今年十二になる娘の口から出た言葉でした。

「さうして、房ちやんはどうする氣なの？」傍に坐りておとなしく針仕業をして居た婦人が直ぐに斯うつゞけました。むしろ悲哀の分子を含んだ調子で。

「そりやァ叔母さん、何でさア、お友達ん處へ行つて遊ぶんだわ。」

「さう、それで解りました。　房ちやんは叔母さんの吩附たことなんざアしなくても宜いッて言ふんだね。」

「いゝえ、さうぢやァ無いんですよ。」とて言ひきりましたが、幾らか耻かしくも思ッたのでしやうか。大層濕ッぽい昔聲でした。

かさねて根問もせず、持つて居た針ばかりを忘れまゝに働かせて居る叔母の腹の中には何んな考察をたくはへて居ることか？　見ればお房もしぶしぶながら、また縫物を取り上げました。　此隙に二人の履歴をざッとお話致しましやう。

お房と云ふのは親無し子で、友達もなければ家もなく、誰一人構つて呉れるものもなかつた身の上。まゝ叔母は名をお時と云つて、矢張親と姉妹は無く、頼みにして居るのも一人の兄があるばかりでした。　しかし、其兄は遠く離れて居るもの、一寸の相談對手にすることが出來ぬところで、お房のやうなものゝ世話をもして遣る氣になりました。

で、お房とこれまでに爲るにも食はせたり、着せたり、爲

たのは云ふまでも無く、自分をお房の「叔母」とまで言はせ、書物や、玩弄品なども買つてやり、學問の方も務めて爲せるやうにし、また一方からは手を替へ、品を換へて、勞はつて遣りました。

これはどよして呉れるお時より、お房の身には死別れた母親の方が遙かに戀しく、をり〳〵思ひ出してはベソをかいたことも有りました。が、これは眞個の僅かの間で、直きにお時にも馴染んで來ました。馴れるに從つて我儘にもなりました。特に進んで居たのは口對で、それに續いて怠惰といふ上等な景物が附いて居るばかりで無く、これ他にもまだ善くないことを覺えました。と云ふのは他でも無く、不正直になつたことで、それが爲め幾分かお時の信用を損なひも爲ました。

言附けられた縫物へは手も着けずに、自分勝手に遊んで居たり。たま〳〵お時が家を明ければその留守を附け込んで、叱られるやうなことを爲たり。何か叔母から責言を云はれても容易に實を打ち明けたことも無く、却つて叔母を誑ます工夫を考へるなど。皆それ例でした。

初先お房の住んで居た家は長家中でも瘦世帶、その中へ母親は持病で寐て居。その上父親は父親で始終酒びたりになつて居て、たび〳〵お房に辛らく當る始末。右を見ても左を見てもお房の身の爲になるものは一つも有りませんでした。お時はこの事情を委しく知つて居るもんゆゑ、つね〴〵斯うあきらめて居ました。——

「お房の心の拗ぢくれたのは父親の責言が多過ぎたからで、

お房が「言ひ籠める」を防禦の武器とする癖の附いたのも已むを得ない譯。たゞ〳〵自分の良心が惡かつたと悟る時の來るのを俟つより他に仕様は無い。」

お時の勞はり方は血を分けた自分の娘と少しも違ッたところも有りませんが、お房は其様なことには頓着せず、自分の爲めを思つて言つて呉れるお時に逆つて口を尖らせるところを見れば、廣い世界の中にたッた一人しかない——實に貴重な——叔母さんに對して、濟まぬとも何とも思はないでしやう。これが尋常の人間であつて、斯様しては惡い、彼様しては濟ない、といふ心が少しでも胸の中へ浮んだなら、縱でも其事は仕遂ぬ筈！

それ中にお房も言ひ附けられた縫物だけは何うか斯うかかたづけて終ひました。仕上げたのを見てお時が、

「房ちやん、濟んだら急いで着物とお着替へ！　叔母さんと一緒に行つて來る處があるから。」

＊　＊　＊　＊　＊　＊

時は冬の初の晝過、お房は椽側の日向へ出て陽背としながら庭の四方を眺めて居ましたが、瞳は次第〳〵に見る處を變へて、山に、川に、果ては晴れ渡つた青空に向きました。それからどうの途端で過ぎ去つた自分の身の上をも考へ出し、幾分の自分の怠惰と不平を鳴らしたのが耻ゝしい様に思はなくも有りません。が、もと〳〵心の底から起した後悔でもなければ、いつか他處の方へ移つて行きました。彼れ是して時間がどの位經つたのか更に氣も附かなかつた折、坐敷の方で起つた不意の呼聲がお房の聽神經を鼓動しました。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

「房ちやん、房ちやん、早くお出で！」

（中）

急はしい呼聲にお房は大急ぎて行つて見れば、お時は蒲團の上へ横になつて居、顔色も蒼ざめて居る。誰が見ても大病としか思はれませんでした。流石にお房も愕いて、「叔母さん、どうしたの？」と云はうとしたが、その猶豫も無く、急ぐにお時が、

「お前、お霜さんを呼びに行つて、其足でいつものお醫師さんの處へ行つて來てお呉れ。ことによると私は大變な病氣になるかもしれないから。」

まさかに是ばかりは背きもせず、いや／＼ながらも二人の家へ驅着たのでしやう。間もなく醫師も來ればお霜も來ました。醫師は一先お時の容体を見てさも重も／＼しさうな面色で、お霜に氣を附けて看護してやれと命せられました。お霜と云ふのは同じ長家に居る看病婦で、お時とは日頃から懇意にして居た中、何んで醫師の言葉に背きましやう？　して見ると何から何まで拔目無く親切に看て遣りました。お房の手はすく譯、手のすいたのも畢竟お房の身に取つては我儘の上塗でした。勿論さうなつたからツて誰一人それを咎めもせず、「勉强しろ」とも「縫物をしろ」とも言ふものは有りませんでした。

用と云つたところが些細なこと。お霜から偶に一寸した小用を頼まれるか、さもなくば少しの間叔母さんの傍へ坐りて居る位が關の山でした。それも大概ならお房にはさせず、お霜が一人で骨を折つて居ました。が、己むを得ない用事があつて一寸留守をする時には、病人の傍へ坐つて居ることをお房に頼む。これがお房には何よりの嫌でした。嫌だといふ其源因は窮屈な爲めばかりで有りません。切角骨を折つて話など仕掛けたところで、病人は一向知らない樣子で、却つてお房の行狀の善くないのをさも／＼失望らしく嘆くのみでした。

が、四五日經つ内にお房の望みも叶つて、病人の傍に居て病人に氣を注けて遣る世話は無くなりました。言ひ換へれば臥床に附いてから第五日目の夕方、お時は黄泉と云ふところへ客となつて行つて終つたのでした。

お霜は所據無く、お時の兄の家へ報らせて遣りました。報らせに驚いて植木夫婦も來て、泣く／＼式の如く葬禮は濟ました。濟ましは爲たものゝ、濟まなかつたのはお房のこゝろ！　葬禮の供から歸ツて見れば、今までの家はもう自分のでは無く、此先自分の身も何うなることかと、游いながらも疑惑の雲に取圍かれました。

「それから彼の娘のことですが、彼れは何うしたものでしやうねェ。」慥かにお霜の聲です。

これを次の室で聞いてお房は自分の運命の定まるところはたゞその答一つと、思はず耳を欹だてました。

「もとの處へ歸して遣るさね」お房の聞いて居るとは氣も附かず、植木の妻が「私はいつでもさう言ッてるんですよ、お時さんも彼樣な娘を置かなくて宜いんでしやうッて。」

「御尤ですが、彼れ程お時さんもお可愛がりなすつてお出たのですし、彼の娘は別に行く家ッて云ふのは有りませんか

ら――私はきッと――彼の娘が泣くだらうと思ひますよ。」

と云ッて一寸植木夫婦の顔を見比らべて、

「彼の娘が大きくなつたら、私と同じ商買を習はせるとか云ふことで、其手筈は私も度々お時さんから伺がつたことがムいました。」

植木の妻もお霜の忠告がましい返答をあまり面白く思はなかつたと見え、今度も話の鉾先を夫の方へ向け變へました。

「彼の娘は友達なんざア無い樣ですからお冬さんの處へやつたら何うでしやう？　ねェ良人、否々ませんか？」

「其樣に急かなくても宜からう」喙を入れた植木と云ふ男も妻に比べて幾分か親切氣のある人らしく見えました。「何處か好い家が見當るまで位も家へ置いて遣るが宜い。」

「良人さへ御不承知がムいませんなら、左樣いふことに爲て置きましやう。　それもさうとして、彼の娘は多分着物が澤山ありましやうね、さうすれば嬰兒の守とさせるや、其處等の小用と足させるには結句好いかもしれませんね。」

それと相談が極まればもう猶豫は無く、早速お房にも概略を話し、家や道具などは言ふに及ばず、お房の書物でならうが、玩弄品でならうが、また奇麗な机でも本箱でも、一つ殘らず賣り拂はれ、自分は植木夫婦と一緒に植木の家へ連れて行かれました。　それからと云ふものは遊べる處ではなく、毎日〳〵辛らい仕事を爲なくてはならず、それで可愛がつて呉れるものも無く、今となつてはそれを愉快だと思ふことは一つも無くなりました。

（下）

その後五六日も經つた頃、植木の妻に勸められて、とある商人の家へ下女に雇はれて行つて見ると、なか〳〵以前の樣には出來ず、仕事は何に限らず以前より一層つらく。夢にも「房ちゃん」とか「房坊」とか呼ばれたことは一度でも無く。親切と云つたら兎れ毛ほども無く。此處お房の身にとつても不愉快の極でした。

お房もいろ〳〵と考へもしました。また言ひもしました（假令其聲漏れないにしろ潜かに心中で）。

「これまでは、御用を言ひ付けられ、小言を言はれ拆した時はいつも叔母さんをお恨み申しましたが、最早これからはお申附けに叛きません。　どうぞ何なりお申附けなすッて……どうぞ……。」

しかし、死んだ叔母さんは何と思つても生きては歸へられぬ、況してものを言ひ附けることもなほ〳〵出來ません。

お房は別に致方も無く、窓の下へどッかり坐つて、めそ〳〵泣き出しました。悲しさと耻かしさとを打ち雜せて。

「あゝ、叔母さん、どうぞもう一度戻つて、どうぞ……も……も一度……今度はきつと云ふことを聞きますから……。」

その時、誰とも知らず、お房の肩へ手を載せるものが有りました。　お房はまた例の主婦が來たのだらうと思つて吃驚しました。　ゝ、これも案外、お房の肩へ載せたのは主婦の手では無く、戀しく〳〵と思つて居た叔母さんの手、しかも優しい叔母さんの聲も耳の邊りに。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

「何だね、房ちやんは、まだ着物も着ないで居るんだね、今仕度するッて先程此處へ來てからもう二時間も經つのに、今まで何をして居たの?」

お房も雙の眼を擦すッて、四方(あたり)を見廻して、不意にお時の腕へ取り縋りました。

「叔母さん、妾今寢入つたの、そしてね長い夢を見たの! 妾は叔母さんが死んだと思つたのよ。 それから伯父さんが來てね、妾を何處か知らない人の家へ遣ッたの。 妾はもう/\困ッて終ッたわ、皆んなして無理なことをパッかり言ふんでそもそれ! 妾は叔母さんに逢ひたくて/\泣いてパッかり居たわ。 だがね、夢だッたから眞實(ほんたう)に嬉しいわ。 おや、叔母さんは怒ッたの? 默ッて居てさ。 妾は眞實に叔母さんが好くなッたわ、もう/\強情なことはしません。 必ッと叔母さんの言ふことを聞きますよ。 妾は叔母さんがなくちやア何も出來ないんだもの、ねエ叔母さん。」

餘りのことにお時は口も出せませんでした。 それもその筈、久しい間同じ家に住んで居ながらお房の口から「叔母さんが好い」と言ッたことはたゞの一度も無く、また此樣に腕に抱き附かれたことも有りませんでした。

全体お時はあまり子供の世話が好きと云ふ方でもなかッたのですが、お房の身がいかにも可愛さうでならなかッたので引取つて世話を爲はしたものゝ、其甲斐が無いのにはほとほと當惑して居ました。 それが僅か二時間そこらの間に全身を取圍んで居た「雲も狹霧もうち拂はれて天日を瞻る」やうになつたといふのは全く夢の功には相違ありません。 けれど、お時もお房の行末の目的に就いてお霜と相談したことが有ッたゆゑ、彼れをお房も聞いて居たので彼樣な夢を見たのでもないかと、憶ふと何となく氣重く思はれました。

此時からお房は正直な娘になることを心に誓ひました。 さうなると叔母に言ひ附けられた用が氣に入らなかッた時のことを思ひ出し 、無性に叔母が難有く、何故叔母の意に隨はなかッたか自分ながら耻かしくなッて來ました。

「この間の夢は皆んな眞實だと思はなくちやアならないわ、またもしさうして彼樣な事がないとも限らないから……だから叔母さんと一途に居る中は務めて叔母さんを慰めて遣りましやう。」

とこゝろは極めて置いても——其處が小兒——隨分すねたことも有りました。 が、今は虚言(うそ)も言かず、謝罪(わび)もする樣になり、幾分かお時の心を安めました。

程なくお時は病氣に掛りました。 その折はもうお房も看護婦になッたことゝて始終枕許(まくらもと)に附添つて居ました。 それからと云ふものはお時のお房を可愛がる情がなほさら深くなッたとのこと。 またお霜もお房の心がこれ程まで變はらうとは思はなかッたと或日お時に話しましたとさ。

かうも容易くお房の心を覆へらせたのもそも/\何であらう? 己れ人を愛すれば其人は望に委かすのは容易く。 地球上の人々を愛それは彼等を樂ませやうと務めるもの! あゝ、愛!

（をはり）

一種の玉子酒

日本これまでの玉子酒はそこし強過ぎていけません。こゝに其一種の物を試みて見たらば出來ました。口あたりも一寸よく、そして猛烈な酔ひ方もせず、風邪なぞの時の飲料には大に適します。

其法、白砂糖酒一合五勺に玉子二つを割り込み、白砂糖四匁をまぜてよく〳〵交せ、之に丁子の粉（丁子水なら猶よし）を適宜に少し入れ。更に又別に七勺五才のシェリー酒に七勺五才の清水を交せ、之を燗し、前の玉子と交せた酒とこれを混合する、かうするとこッてりした美味の酒が出來、しかも玉子の匂ひは依然としてよく殘ります。

鬚と人物

つまらぬ事ながら一寸變です。西洋は鬚武者の多い國、それでありながら英雄豪傑に得て鬚の無い人が多いことでした。まけどんの歴山王も鬚無しでした。羅馬のしいざるも鬚無しでした。なぼれおんも鬚無しでした。普羅西のふれでりひ大王も一時鬚無しでした。米國のわしんとんも鬚なしでした。

其外文學者、理學者、技術家なぞに至ッても此奇相を有りました。みるとんも鬚なし、せんぐ（詩人）も鬚なし、其外にはわつと（發明家）もさう、今日の發明大王えぢそんも同じく鬚は嫌ひな人です。

物の言ひ方

物の言ひ方ほど謹しむべきものは有りません。惡氣で言ッたので無くても言ひ方がわるいと惡く先方に思はれ、飛んだ事になるのは世によく有ります。

ある處の學校で試驗が有りました。丁度數學の試驗で敎員が生徒に問題を掛けて居ました。

「皆さん御聞きなさい、こゝに私が隱元豆を一皿持ッて居ます。處で其中から十二分の二を一人にやり、十二分の二を又一人にやり、また十二分の二を一人にやり、それから元の隱元豆全体の半分を私が食べるとした處で、あとへ何が殘りますでしやう？」

問題はこのやうなをかしなのでした。無論あとには何も殘らぬ勘定です。ところで生徒の一人が手早く運算して答へました。

「先生、御皿が殘ります。」

道理はこれで宜しいです。けれど實は言ひやうが一寸敎

師の氣に障りました。　一同の生徒が笑ひ出す、教師は些と氣の早い性と見え、赫として逆上して生徒を大に叱り付けました。　何が殘ると教師が聞いたのもよくは無いですが、皿が殘るといふのも嘲弄の語氣を含んで居ました。　これをば斯う言はず、「何も殘りません」と言へば大に体面が宜しくあるのです。　同じ意味でありながら言ひ方といふ物は其實これ程六かしいものです。

通信答問

TN生——㈠江戸紫で撰んだ文壇十傑の作の一種宛を擇めば、まづ當社中の意見で斯うです
露伴、對髑髏○美妙、いちご姫○紅葉、戀山賤○篁村、三筋町の通人○南翠、朧月夜○思軒、ユーベル○二葉亭、浮雲○嵯峨屋、初戀、此他は何とも言へません㈡立花屋かをる氏は法學士です、扨關直彦氏ではありません㈢韻文は節奏に據る文といふ義で、廣い名です。唱歌は其中の一部分です㈣脚本杯にある木の頭、これを幕切に柏子木を一つ打込む、其打込むはじめの一つを木の頭といひます

藤元あさ——㈠國民の友にある韻文論の意味を絞ッていらつめにも出せとの御言葉、承知しました。次号邊から實行しましやう㈡懸募諸嬢の住所を當紙上に掲載の事は子細あッて見合せます。郵券を添へ御問合によれば、協議の上御答へ申しもしましやう㈢女子のために文學料のみを教へる學校といふのも當地にもありません。明治女學校ぐらゐなものです。男子のためには專門學校、錦城學校など有りますが㈣當地一ヶ月の下宿料は四圓以上六圓以下です㈤言文一致体文章習練欄の御請求忝く存じます。何れ工夫して其内から本誌内に設ける事にしましやう。

白芙蓉女——㈠前のいらつめに出した髮の艶を出す法の用劑桐の葉は枯葉で宜しいのです。又桐の木屑でも宜しいです㈡前の藤元氏への答の第二を御覽下さい。

きぬ——㈠饗庭篁村氏の七草は問合せましたがまだ返辭が來ません㈡むし歯のウロへ詰めるのは矢張り金銀が最上です護謨は早く腐れていけません㈢小說の題の命じ方に別段規則も有りません。著者の心次第、或は形容した語或は人物の緣語杯から命ずるのです。委細は其内に本紙上に言ひましやう

社告

いらつめ第七十六號 本月二十日發兌の分は歲末に迫つるため一回**休刊**として明廿四年一月の十日より相違なく**第七十六號**を發兌します此分と初刷ゆゑ聊か珍らしい御景物が有り升

名刺印刷 かねて本社でせる名刺印刷は歲末に迫つて大に忙がしく爲ッるため東京府下は本月十八日迄地方は十五日迄を限り其以後の御注文を一切謝絕し升

●いらつめ●明治二十三年分(但七十号欠)

●●●**合本**●●●

いらつめ　三十六部合本

一冊價九拾錢(郵稅おまけ)

早くわらんべを讀むべし

問「近頃は生徒用の雜誌も一雨毎に殖ゑるとは殖ゑるやうですが其の基礎の如何にも手堅くそして廢刊などの心配のないものは果してどの雜誌でせうか」答「先づどの雜誌よりも基礎が手堅くて至極安固なるものは外でもありません同胞社の

わらんべ　毎月一回發行　定價貳錢　郵稅五厘

誰にても一たびわらんべを見られた人はご承知ある通り其の誌中には　わらんべ。小說。雜纂。叢談。問答。餘興。文藝。廣告。(毎号少くも二個以上の圖書を挿む)等の八欄を置いて生徒諸子の心得となる事柄を普く網羅し文章も面白く且つやさしく何人にても讀めるやうに物したれば此種の雜誌中でも極上乘無類飛切です故に一号でも早く讀まねば夫丈けの損あり増して二号も三号も後れて氣付くとも已に晩し／＼

發行所　同胞社
仝　仝　仝　岡山縣岡山市大字上ノ町六十一番地
賣捌元　細謹舍

女學雜誌改進大畧

帝國議會の議事初めて催さるゝの日、日本の國勢將に一開變せんとするの初期日たる、十一月廿九日發行の女學新誌第二百四十一號より、著じるしき改進を爲す。面目新らしく變はり、一入は目立てとあるべし。

即はち、欄と、社說、言行、雜錄（集會談話の速記、訪問の記錄、反譯、其他樣々の項目を含む）、家政、小說、兒鑑、批評、文學、理學、笑草、問答、寄書、隨感、時事、新誌、女報、週報、物價、統計、紹介、の二十欄に分ち、從來掲載したる項目の外に、實際の家政經濟取締の件、細君及母親の心得となる覺悟、佳人英雄賢者義人なぞの言行、文學理學なぞの俗解、物のねだん、病人の取扱方、一切の女の心得向なぞを、尤も平易に且つ尤も面白く講述せんとす。

之が爲めに、從前の社員の外に、更に女記者八氏を聘し、各得意の欄に應じて秀妙有益の執筆を請ふべし。中島俊子女史は警拔俊秀の靈文を以て、時事問題を評し、且つ寸鐵殺人の短詩を以て同胞に警告する所あらんとす。若松しづ、田邊花圃の兩女史は、其純潔なる思想又は其才慧なる運筆と以て、各自特得の小說を起草せんとす。女子師範校の卒業生たり、日本女醫の破天荒たる荻野吟女史は、衞生、看病の項目を懇ろに講話あらんとす。同じく女子師範校著名の卒業生にして多年理化學を研究し且つ長年之を教授ありける吉田伸子女史は、理學を平易に又樂しく多く解釋せられんとぞ。明治女學校速記科第一回卒業生安藤たね子は、四方の有益なる講談會に臨みて、有益なる談話を筆記し、讀者をして坐ながら、諸大家の談話を聽聞せしめんとす。又た、家政學を學術的に講究し、我國に順序立ちたる家政學を創起せんとに熱心し、現に之を研窮し亦常に之を教授せらるゝ所ろの小島きよ女史に請ふて、家政及び兒鑑に信仰あつき最と潔ぎよき說話を掲げんことを欲す。而して、淸水豊女史は、專ばら、主筆、編輯の任に當り、全躰の責めを負はんとす。但し、巖本善治が女學雜誌に關係する所敢て今日迄と異なることなし。

女學雜誌も、今后如此く、平易に且つ面白くあるべし、左れば、往來不肖の意見を棄てずして其改革主義の慷慨論あるに愛顧せられたる讀者諸君は、如此き改進を以て或は不滿足と爲し玉ふこともあるべし。吾人も亦之を憾む。故に、月一回の大附錄を添へ、之に於て愚見を十分に吐露し、女學雜誌相應の大議論と公けにすべし。今后女學雜誌は、始んぞ完備したる「家の雜誌」西洋所謂るホーム、ジヨウナルとなるべし。而して女學雜誌が恩任したる社會改良的の慷慨意見は、其間に輝々として輝やき、毎月一回の附錄に於て更に大煥發することあらんとす。其他一層細密なる躰裁何如あらんかは、第二百四十一號以后の雜誌紙面を見て希くは惠許せよ。

要目

女學雜誌　淸水豊子編輯
右每週各土曜日早朝全國に配布

附錄女學　礒貝雲峯編輯
右每月第一土曜日女學雜誌附錄

女學雜誌定價元の如し
一册六錢、郵稅五厘、府內郵稅なし
十册前金郵稅五十八錢

附錄女學定價なし無代
但し直得意前金拂の讀者にのみ呈そ

改進せる第一號に廣告掲載委賴の諸君は本月廿五日迄に申込あるべし

直注文せんとする諸君は今月中に申込まるゝ方便利なるべし來月初回の大附錄より順次に閲覽することを得べければ也

東京下六番町六番地

女學雜誌社

女學雜誌、通信女學、女學生、發行所

女學書類出版所、同じく取次所

遞信省認可

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

以良都女 第四巻 明治二三年

発行者 船橋 治

発行所 不二出版株式会社

東京都文京区本郷二丁目一六番六号

電話〇三(八一二)四四三三

振替 東京六—九四〇八四

印刷所 (有) 東光

製本所 青木製本所

一九八三年一一月二五日／復刻版発行

©1983

乱丁落丁はお取り替えいたします

Digitized by Google

Original from CORNELL UNIVERSITY

CORNELL UNIVERSITY LIBRARY
3 1924 113 041 895

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

CORNELL UNIVERSITY LIBRARY
3 1924 113 041 895

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

WASON
HQ
1762
I75+
no.38-75
1890

ASIA

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY